

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

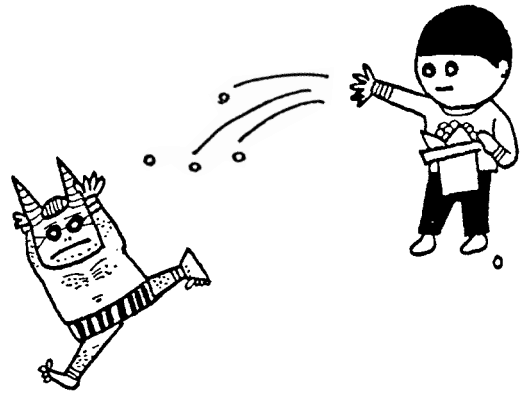
2021 年(令和3年)2月5日
第 693 号国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

ブッククラブから

石川達三著

戦争文学としての
『生きている兵隊』

三好 紀子



石川達三は1937年12月下旬中央公論社特派員として中支方面へ出発、翌年1月まで南京にも滞在した。先立つ12月17日が南京入城式であった。帰国後紀元節までに書き上げ掲載された『中央公論』3月号は即日販売禁止となり、作者と発行者は禁固4か月、執行猶予3年の判決を受けた。

なぜ発禁処分を受けたのか。1999年初版の公文庫版は検閲を受け削除された箇所を線で引いている。戦時国際法で禁止されている虐殺、強姦、略奪、放火にあたる日本兵の行為が描かれており、それらはすべて伏字となっている。「捕虜は捕えたらその場で殺せ」という方針は上部から出ていたので、数珠つなぎにした13人を片っ端から順々に斬っていった。しかし捕虜が急に静かに俯いたので斬ることができず銃で撃ち殺した場面、廃墟で姑娘(クニヤ)を見つけた兵士が女性を殺したと聞き、「勿体ないことをしたのう」という上官の言葉から、また「生肉の調達」という隠語から書かれていない行為の想像がつく。一方で戦闘の末、勝利した南京その他の町で無限の富がこの大陸にはあるとし、邸に入り日時計を手に入れ、支那人が愛した悠々として政治と文化とが遊離した心境を味わう兵士の実態が描き出されていたのである。

この作品は南京陥落の報に提灯行列で沸く日本国民に、作家石川達三が日華事変の様を国民に問うものであった。戦場で「生きている兵隊」がそれぞれにいきついた心境を述べている部分も削除されている。「今では死のうと焦る気持ちもないし自分の感情が支えきれないほど掻き乱されることもなかった。(中略) おちついて柔らかに慈悲ぶかくなっていた。

彼は心のひろがりを感じ安定を感じていた。(中略) 敵の命を軽視することからいつの間にか自分の命をも軽視するに至った極めて直観的な自然の心理状態」を得た彼は堂々たる軍人になり兵の信望と尊敬を得た。この少尉を中核において、戦場に妥協し真剣みのない自堕落な精神になり、中国人の上に立つ誇りを楽しむもの、戦争からなんの影響も受けぬもの、にわかに欲張りになった元僧侶は仏像などを持ち出してくる。しかし怠惰に戦場になじんだはずの元医学生は、慰安所に通う日々の中で精神の錯乱を起こし、軍規に触れる羽目に陥る。私が驚くのは、戦闘場面でも勇敢に戦い死んでゆく一人一人の兵の命を尊び悼む日本軍の真摯な姿があるとともに、敵軍兵士をせん滅せんとする残酷な描写があり、戦闘が終わった土地でいつもと変わらぬ農作業につく農民の姿があることだ。

石川達三が記す通りこの作品はフィクションであるが、講師の山岸郁子先生は「事実と経験を正確に表しているか否かは問題ではない。読者がどのように読むか作者がどのように伝えようとするかの駆け引きでもある。戦争の強烈なリアリティを読者に伝えるために言葉が動員されている」と言われた。この本は全編立ち止まって考えることを求めている。また、「くにたちブッククラブ」で交換された読みの中で、南京大虐殺についての言及があった。本書に避難民の数などがあるので「自分で確認された。また「元来武力闘争は経済闘争の行き詰まりを打開する目的であった。」という一文を忘れてはならないと思う。

ブッククラブから

沼田真佑著

『影裏』——震災が残したもの——

関 美智子

『影裏』は、2017年第122回文学界新人賞を受賞した沼田真佑のデビュー作で、その作品で同年第157回芥川賞を受賞した。また2019年に盛岡出身の犬友啓史監督によって映画化され、2020年公開された。

私はデビュー作品は単行本で読み、手に取った本の触感、本の表紙デザインで著者の思い(心音)や熱量を推し量る。『影裏』の本は薄く、しかし、表紙絵の光と影のある写真とタイトルと著者名がL字型に並んでいる文字は融合して不思議な重厚感を覚えた。

その美しい『影裏』の装丁に誘われてその世界に入っていく。「勢いよく夏草の茂る川沿いの小道」にはじまり、生出川の釣りの話。岩手の樹木や川や草花それに小鳥や生き物の表現が鮮やかである。土地の表現を北緯39度とは、私は日本地図で調べた。また人物描写は映像の如く浮ぶ。例えば、「手の甲で日浅は唇をぬぐって、眉に溜まった汗の雫は指先でつまんでそのへんに捨てた」とか、「そもそもこの日浅という男は、それがどういふ種類のものごとであれ、何か大きなものの崩壊に脆く感動しやすくできていた」などと。井上氏は「いたって気さくな人柄」と。副島和哉は別れる直前の夏に性別適合手術(SRS)を受けるつもり

だとか。アパートの同人である鈴村さんのことは、最初の印象を「おぼんでございます」と深々とお辞儀をしたが、次に会った時の言葉は「こっただにごっちゃりしもつてらない、わが駄目だえんな!」との大した剣幕に次からは苗字ではなく、次の人と呼ぶようになった。所作から人間模様がわかる気がする。この小説の特徴は他には、時系列がはつきりしないこと。もう一つはカタカナ文字が多いこと。例えば、掘っ立て小屋^{リオン}、車の車種や煙草、日用品、酒類、食料品など多種類に及ぶ。それらは、独身貴族の上級志向が感じられる。

この小説構成は3章から成り立っているが、最終章の今野と日浅の実家の父親との会話が胸をつく。最終章は鈴村さんの教え子高橋愛月さんの震災記事にはじまり、西山さんより日浅の行方不明の連絡が入り、今野は日浅の行きそうな飲み屋をさがすが情報が得られず、日浅の実家の父親を訪ね、今野と日浅の関係を詳細に説明し、捜索願いを出すように説得するが、父親から「もう父親ではないんですよ」と思わぬ言葉の返答。日浅の学歴詐称が明かされる。父親は「信じる者を裏切った、そんな不実な人間が、暢気に釣り糸を垂れなどしておったところを大津波に吞まれたとして、



何だというんです?(中略)まじめな人生に対する、一種の冒瀆^{ぼうとく}ですよ」と父親の言葉は重い。それから「いずれにせよ何らかの事件で、あの男の名前は新聞に出ますよ。わたしは確信しています」と。そしてパンツの尻ポケットから息子の大学合格通知を今野に見せる。そこには父親の息子に対する心の葛藤と愛が滲み出ている。今野は日浅から解放されたのだろうか? いや、このことは、今野の心の奥底に残るであろう。去年の夏に見た水楢の倒木は立派な切り株を残し、生出川で今野は初釣りりで虹鱒を釣った。今野の生活に明るい日常が戻りつつあるような景であった。

講師の佐藤先生より「ほのめかし(描写を重ねること、物事の関係を詳らかにしない書き方)」についての説明があった。また、芥川賞の評価方法と、第157回の選考委員の講評と評価について話された。ここに北上川の鶴飼橋の啄木の詩を紹介する。啄木の長詩「鶴飼橋に立ちて」一部引用。

月とし語れば ここよ永久の詩の頹朽ちざる鶴飼橋。

※参考 表紙の写真(小林史子撮影) インスタレーション(窓、コナツツ葉、扇風機、土、電球、竹、釣り糸、素焼きの植木鉢) シャウドフリ・バリ(カルカタ・インド)

新着図書から

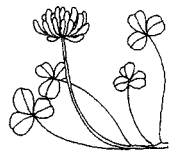
〔総記〕			なぜ原爆が悪ではないのか 宮本ゆき (岩波書店)			319
物語の海を泳いで			つくられた格差 エマニエル・サエズ (光文社)	319		
〔哲学〕			中年格差 橋本俊詔 (青土社)	361		
角田光代 (小学館)			東京裏返し 吉見俊哉 (集英社)	361		
〔歴史〕			「母と息子」の日本論 品田知美 (亜紀書房)	367		
伊藤邦武 (筑摩書房)			フェミニズム大図鑑 ハンナ・マッケン (三省堂)	367		
アウシュヴィッツ潜入記			これからの男の子たちへ 太田啓子 (大月書房)	367		
ヴィトルト・ピレツキ (みすず書房)			ペンとミシンとヴァイオリン 清末愛砂 (寿郎社)	367		
景観からよむ日本の歴史 金田章裕 (岩波書店)			さよなら、俺たち 清田隆之 (スタンド・ブックス)	367		
文学で読む日本の歴史 近代的世界篇			産めないけれど育てたい。	367		
AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦後			池田麻里奈 (KADOKAWA)	369		
五味文彦 (山川出版社)			婦人保護事業から女性支援法へ 戒能民江 (信山社)	369		
庭田杏珠 (光文社)			ブラジル天使が舞い降りる村のカノア保育園	369		
藤野裕子 (中央公論新社)			肉とすつぽん 鈴木真由美 (サンパティック・カフェ)	369		
歴史の中のロシア革命とソ連 塩川伸明 (有志舎)			子ども心の声を聞く 堀正嗣 (岩波書店)	369		
世界は女性が変わってきた			イスラーム／ムスリムをどう教えるか	371		
ケイト・ホッジス (東京書籍)			荒井正剛編著 (明石書店)	371		
復元！被爆直前の長崎 布袋厚 (長崎文献社)			はなれていても、だいじようぶ	371		
〔社会科学〕			副島賢和 (学研教育みらい)	378		
ザンビアを知るための55章			アイヌの祈り 堀内昭彦 (求龍堂)	382		
島田周平編著 (明石書店)			フィッシュ・アンド・チップスの歴史	383		
香港とは何か 野嶋剛 (筑摩書房)			パニコス・パナイー (創元社)	383		
地図で見るイスラエルハンドブック			戦争と法 長谷部恭男 (文藝春秋)	391		
フレデリック・アンセル (原書房)			〔自然科学〕	391		
コロナ後の世界を生きる 村上陽一郎編 (岩波書店)			はずれ者が進化をつくる 稲垣栄洋 (筑摩書房)	460		
談論風発琉球独立を考える 前川喜平 (明石書店)			こどもの目をおとなの目に重ねて	460		
ロヒンギャ差別の深層 宇田有三 (高文研)			ウイルスの世紀 中村桂子 (青土社)	465		
あれからールアンダジェノサイドから生まれて			人生で大事なことはみんなゴリラから教わった 山内一也 (みすず書房)	465		
ジョン・サン・トーゴヴニク (赤々舎)			死を受け入れること 山極寿一 (家の光協会)	489		
ブラック・ライブズ・マター (河出書房新社)			小堀鷗一郎 (祥伝社)	490		
放射能を浴びたX年後 伊東英朗 (創風社出版)				490		
			感染症の世界史 石弘之 (KADOKAWA)	493		
			私の夫は高次脳機能障害です 奥宮暁子監修 (医歯薬出版)	493		
			〔工業〕			
			エネルギー新時代の夜明け 山地憲治 (エネルギーフォーラム)	501		
			環境再興史 石弘之 (KADOKAWA)	519		
			宇宙に行くことは地球を知ること 野口聡一・矢野顕子 (光文社)	538		
			美容は自尊心の筋トレ 長田杏奈 (エレキングブックス)	595		
			〔産業〕			
			農家が消える 寺西俊一編著 (みすず書房)	615		
			甘いバナナの苦い現実 石井正子編著 (コモンズ)	625		
			牛疫 アマダ・ケイ・マクヴェイ (みすず書房)	645		
			〔芸術〕			
			日本の戦争映画 春日太一 (文藝春秋)	778		
			〔文学〕			
			引き裂かれた世界の文学案内 都甲幸治 (大修館書店)	904		
			心友 小川壮六 (作品社)	910		
			ベージュ 谷川俊太郎 (新潮社)	911		
			過去未来 吉竹純 (河出書房新社)	911		
			日本俳句入門 吉竹純 (岩波書店)	911		
			類 朝井まかて (集英社)	911		
			生きる！ 嵐山光三郎 (新講社)	911		
			犯罪調査 井上ひさし (中央公論新社)	911		
			コロナ黙示録 海堂尊 (宝島社)	911		
			宮沢賢治『銀河鉄道の夜』と宇宙の旅 谷口義明 (光文社)	911		
			月はまた昇る 成田名璃子 (徳間書店)	911		
			本とあるく旅 森まゆみ (産業編集センター)	911		
			彼女の名前は チョ・ナムジュ (筑摩書房)	921		

図書室のついで

『美しき』

小さな雑草の花図鑑

身近な雑草の魅力



お話 多田 多恵子

(早稲田大学・立教大学非常勤講師)

厄介者扱いされがちな雑草ですが、目を近づけてよく見れば、驚くほど繊細で美しく、個性豊かな花を咲かせています。

今回は植物についての基本的な知識から、雑草の愛らしい花、生きる知恵など、身近な雑草たちの魅力をスクリーンいっぱい、の美しい映像で見せていただきます。さらに観察方法も教えていただき、雑草の楽しみ方を広げましょう。

〈多田さんの本〉 表題作、『もっと美しき小さな雑草の花図鑑』(山と溪谷社)、『したたかな植物たち・春夏篇』『同・秋冬篇』(ちくま文庫) ほか多数

とき 2月28日(日) 朝9時半〜11時半

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込先 2月10日(水)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141

*発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。
また、マスクの着用をお願いします。



〈私の本棚から 第5回〉

居場所カフェ立ち上げプロジェクト 編著

『学校に』

居場所カフェを

つくる！

生きづらさを抱える高校生への

寄り添い型支援



石井 翔梧

中退や不登校に代表される「教育からの排除」が、ひきこもり、ニート、ワーキングプア

等、その後の社会生活における困難に直結してしまう現状がある。そのような中で「高校生居場所カフェ」と呼ばれる実践が注目を集めている。この実践は、多様な背景を抱える生徒が集まる定時制高校において、若者支援の経験を持つスタッフが学校に入り込み、飲み物やお菓子を提供しながら、生徒の居場所づくりを行うものである。本書では、カフェを運営するスタッフや高校の教員、教育学の研究者等、様々な立場の大人が、カフェの実践やその意義を語る。

率直に、自分が高校生の時にも、こんな場所があれば良かったなと思う。自分自身の高校時代を思い出しながらカフェの魅力を考えて時に、もっとも重要であると思うのが、「開かれた場である」ということだ。自分の高校では、

スクールカウンセラーの方が在中する「お悩み相談室」のような部屋が設けられていた。しかし、そこに行くことは、「悩みを抱え、他人に頼るしかない自分」を意識せざるを得ないわけで、

他人からどう見られているかに敏感な年代には足が向きづらい。実際、高校在学中に「お悩み相談室」に通っている同級生を見たことがなかった。カフェであれば「とりあえずスタッフと雑談をしに行く」「お菓子を食べに行く」という名目で通い、雑談の中で、日々のモヤモヤを吐き出すことができる。

色々な大人と出会うことが出来ることもカフェの魅力であろう。自分自身、高校時代までは「学校が世界の全て」であつたように思う。勉強、部活、友人関係……。狭い価値尺度で自身や他者をはかり、一喜一憂していたことを思い出す。数十歳離れた大人や、少し年上の大学生と関わることは、高校生の価値観を広げることにもつながりそうだ。

定時制高校を中心に広がる「校内居場所カフェ」であるが、様々なレベルの高校はもちろん、小中学校にも広がっていくと面白いと思う。2020年度からスタートした新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」が掲げられた。学校教育を学校内に閉じず、地域の人々と協働しながら、子どもの育ちを支えていくことを目指している。地域と学校をつなぐ「高校生居場所カフェ」実践のよい部分や課題を検討することは、地域と学校のよりよい協働の在り方を模索する上で、たくさんのヒントを与えてくれそうだ。(明石書店)

